

史料館所蔵最古の歩兵第十六聯隊史

「第五回」明治三十七八年戦役

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【陽城塞附近の激戦】

終に一夜を食わず眠らず、濁水に浸り雨に濡れ、戦友の死屍を盾として戦った。明ければ十三日、第一軍の主力が各方面に亘って最も目覚しき激戦をした日である。殊に最難局に当たったものは吾が歩兵第十六聯隊、特に其の第一大隊であった。

天明と共に彼我の砲撃は一層熾盛となり、我が陣地附近は寸地として敵弾を蒙らざるなき中にも、第一大隊の占領地点は各方面よりの弾巢となり、其の惨害最も酷烈を極めた。

我が前面に屹立せる浪洞山（一八二高地）は、東方蓮華山（上焼達溝北方高地）と馬耳山の連脈と相連なりたる最要最高の陣地にて、之を得ると否とは実に軍全線の勝敗に関するものである。されば敵も其の山上に拠れるは歩兵一個中隊に過ぎぬが、其の北麓には約一個旅団の歩兵を隠蔽して深く企図する所あるものの如くであった。

依って聯隊長は其の守兵少なきに乗じて同高地を占領して機先を制せんと欲し、命を第一大隊長仁平少佐に伝えた。少佐は心中決する所あり、出発に際して部下に告げた。

「最後の勝敗の決は、今や全く懸かって此の一地点に在り。敵の兵力の刻一刻に増加するに反して、我は救援の道も全く途絶している。占領の必成は固より望み難い。連日連夜不眠不休の戦闘に依って、疲労困憊其の極に達せる将士を駆って今又此死地に陥らしめるは、実に九腸を寸断されるの思いあるが、全軍の為には忍んで大隊を犠牲に供しなければならぬ。予は既に心を決した。諸士も又予と共に、陛下の御為国家の為に笑って死地に就けよ」

声色沈痛を極め、部下の将卒感極まって一語発する者なく、自ら両眼を衝いて迸り出る熱涙を払って、共に俱に固く死を誓い、第二・第三中隊を第一線、第一・第四中隊を第二戦として、砲兵の掩護の下に浪洞山に向かって前進を開始した。

時に午後二時三十分、既に固く死を誓へる将卒は飛び来る弾丸を物ともせず、全中隊を第一線に展開してひたすらに押し進んで、同高地稜線附近に達したる時、約二個大隊の敵歩兵は此の高地の北麓より出て、我が前方約五十メートルの地に進み、僅かに一稜線を隔てて対戦し、互いに死力を尽くして奮戦中、大隊長仁平少佐は胸部に貫通銃創を受けて先ず壮烈なる戦死を遂げた。

是より先第二大隊は第一大隊の右翼に展開して、其の攻撃を掩護したが浪洞山の南面は恰も馬の背の如く、其の稜線狭小にして両側は削れるが如く、辛うじて数十名を散開し得るに過ぎず。強いて右側に寄れば窟溝の敵砲の猛射を受け、左翼より進めば城山より掃射され、正面は勿論頭上より瞰射されて、守らん陣地もなく進まん地域もない。

夜来敵の鎖鑰陣地に膠着して、攻撃の進展意の如くならざるに切齒扼腕しつつあった谷山聯隊長は、此の状況を見るや憤激措かず午後三時陽城塞の東南鞍部に到着せる第三大隊を引揚げ、自ら先頭に立ちて第二大隊の線に達し南面高地左側に展開して窟溝の砲兵陣地に前進せんとしたが、高地上は全く敵の弾巢と化し、死傷して断崖より転落する者数を知らず。

加えるに我が左翼より協力して城山を攻撃すべき筈の隠岐後備旅団は、何故か陽城塞部落に在りて停止し、為に第一大隊は一層の苦境に陥りて今は僅かに三将校、一特務曹長を残して将校殆ど全滅し、第二大隊も又将校を残せるのみにて、下士の指揮する中隊すらあるに至った。

従って散兵線は愈々希薄となり、辛うじて数歩に一名という如き哀れむべき第一線を保つに過ぎず。それすら処々に欠陥を生じ、一方を塞げば一角を破られ、右翼進めば左翼退き、しかも前後五回の逆襲を受けて到る所に死屍累々として算を乱し、重傷者血に塗れて呻吟するという惨状であった。

此の悲惨なる光景は数里の後方より手に取る如く望見せられ、軍司令官及び師団長等は目の当り此の状を望みて、憂苦措くに能わずと雖も、此の時手の内に一兵なく、徒に手に汗して其の成行きを傍観するの外無かった。

既にして第一・第七中隊は、巧みに前進して高地東稜線の敵に肉薄し、なかんずく先頭に進める第七中隊の大崎少尉は心中深く決する所あり、既に其の大半を失える部下小隊と附近に散在せる残兵を併せ指揮し、大声疾呼白刃を振って敵陣の一角に突入した。

敵は此の余りに意外なる突撃に狼狽し、射撃の違なく弾薬箱及び岩石を投じて防ぎ、我が突撃隊は銃剣を振って縦横に憤激突戦し、矢庭に数十名を突き伏せ一部を断崖の下に突落して遂に其の一角を占領した。此の時大崎少尉は壮烈なる戦死を遂げた。

同時に第二・第三大隊の沈着堅忍なる射撃は、遂に其の威力を発揮して窟溝の敵砲を沈黙せしめ、さしにも頑強であった敵兵も茲に全線動揺を始めた。聯隊は機を逸せず破竹の勢いを以って最高頂に突撃し、第一大隊は更に進んで城山を占領し、天地に轟き山河を揺るがす万歳の声と共に、吾が軍旗は浪洞山の最高頂に植立した。次いで蛤蠣塘の敵砲数門を殲滅に帰し全く陽城塞一帯の線を確実に占領した。

陽城塞の高地線一度我が手中に帰するや、形勢は急転直下、左右の友軍は恰も大河の決するが如くに一斉に攻撃前進に転じ、暮色悠然として山野を覆う間に在って、呐喊の叫び、万歳の響きは各所に起こった。

此の日、黒木軍司令官は仁平大隊が終日奮戦の状を目撃して、其の偉勲を認め聯隊が浪洞山を占領するや、即時電話を以って第一大隊に感状授与の旨を伝え、間もなく伝騎は一片の罫紙に鉛筆を以って走書きにせる感状を持って駆け付けた。旅団長岡崎少将は鮮血に塗れて斃れたる仁平少佐の頭辺に居して、其の全文を朗読した。

十四日第三大隊は歩二九聯隊長島田中佐の指揮に属して追撃前進し、他は旅団予備となりて蛤蟆塘東方高地南麓に到る。

第三大隊は前進中、英守屯北方四百メートルの地点に於いて、約一個大隊の敵歩兵と戦闘を交え、午後四時之を北方に撃退し行く行く残兵を射殺して午後五時西溝山を占領し、聯隊は是より先三時三十分西溝に侵入した。

十五日聯隊は鄭家堡に至りて塔山方向に対し警戒し、第三大隊は聯隊に復帰した。次いで二十二日歩二九と交代して陽城塞に移転した。

【沙河の対陣】

此の時にあたり我が軍は、戦闘力の快復を待つて更に追撃に移らんとしたが、敵は益々優勢となりて再び攻撃し来たらんとする状が見えたので、之が対抗の策を取るに至った。

吾が聯隊は陽城塞・八家子・下焼達溝等に分駐して、日夜防御工事に従い塹壕を増設し、交通壕を開き、要所には機関砲を配備し掩蓋を設けるなど、半永久に近き防備を完成するに至った。然れども敵と相隔てること遠きも千七八百メートル、近きは三四百メートルのして、敵は不断に銃砲火を我が陣地に送り来た。我は自重して弾薬の節約に努めた。

斯かる間に既に北地の冬は迫って、沙河の流れも氷結し寒気は愈々凜冽を極めるに至ったが、村落の家屋は概ね砲弾に破壊されて雨露と寒さとを凌ぐに由なきをもって、防御線の直後に窖室（きょうしつ：地下に掘ったあなぐら）を造り、一窖およそ二十人を収容したが綿々相連なって防御陣地と連絡し、一呼直ちに戦闘配備に就き得るの便がある。

此の対陣中、内地より多数の補充兵を続々と後送し来たりて、従来の欠員を充たし各聯隊とも尚三四百名宛ての過剰を生ずるに至った。よって是等の補習練成に努め、射撃は前面を徘徊する敵を目標として実弾を以って行い、歩哨、斥候等の勤務は之を敵前に実習せしめ、防御工事作業も又敵弾雨注の下に教授し、唯密集運動のみは敵眼を避けて後方に於いて教練をした。

斯くの寧日なき努力の結果は、就役半歳の補充兵も対戦末期には平時三年の教練を受けたる現役兵に比して遜色なき技量を有するに至り、奉天会戦に曠古（こうこ：前例のないこと）の偉勲を立てる素地は実に此の間に養成された。

而して此の対戦陣中三十七年の天長節、三十八年の新年及び紀元節の三大祝日を迎えたが、特に一月元旦は照々たる小春日和の空に一点の雲影なく、日章旗は各寢室の入口に翻り、附近の土民相率いて喜びを軍門に致す等、満州の野は既に王化の洽きを思わせたが、夜半十時三十分、旅順陥落の快報に接し万歳の声全陣地に亘り天地を震撼して起こった。

風声鶴唳にも夢驚かす露軍は之を聞いて、我が軍の夜襲と思い違いたるか忽ち一斉射撃を開始し、其の状宛ら爆竹を以って新年と旅順の陥落とを祝するものの如くであった。

【黒溝台の赴援】

沙河の会戦後、敵は陸続き本国より増援部隊を得て遂次其の右翼を張り、新春の初めに当たってミスチenko騎兵団は営口を襲撃して失敗したるも、旅順要塞陥落の報に接するや、第三軍の転進に先立ちて自ら攻勢に移らんと欲し、一月中旬以後頻りに其の兵力を東より西に移し、ミスチenko騎兵団も又之に加わって、極東第二軍十余万の大部隊は一月二十五日、續粉たる飛雪を冒して我が左翼黒溝台附近の守備薄弱なるに乗じて之を突破し、同時に優勢なる兵団は沈旦堡を陥れ次第に我が左翼を包囲するの形勢となった。

茲に於いて臨時立見軍編成せられ、総予備隊たる新来の第八師団これが中堅となり、第二・第五師団の大部分又之に参加し、二十七日より此の優勢なる敵に対抗して、積雪を踏み、疾風を冒して激戦三日、我は死傷八千に成らんとする大犠牲を払ったが、敵にも一万三千に達する大打撃を加えて、遂に之を撃退して左翼突破の企図を挫折するに至った。

一月二十六日午後十時、突如として命あり、「即時出発して大藍旗に向い第八師団の空位を填充すべし」と、師団長は現在の警戒部隊を除去し、当旅団及び歩兵四連隊の半分を派遣するに決し各隊は直ちに準備を整えて、二十七日午前一時半宿営地を発し續粉たる大吹雪と、摂氏零下二十度の極寒とを冒して体力の及ぶ限りの急行軍を以って翌日大藍旗に到達し、暫く鋭気を養わんと宿営に就いたが夜半再び浪洞溝に前進の命を受け深夜結束して五里余を行進し、二十八日早朝浪洞溝に到着した。

（三尖泡附近の戦闘）

当時第八師団は老橋・蘇麻堡・五家子の線に在って対戦し、村山支隊は屈家窩棚・斜哨の線に在って奮戦中であつたが、未だ目的を達せず共に苦戦中であつた。

依って旅団は其の中間に進出して攻撃を援けるに決し、午前十時浪洞溝を発して三尖泡に向って前進した。然し我が左側背と村山支隊との間なる巴荒地及び哈爾堡に約一個師団

の敵騎兵あり、平坦開闊なる地域を躍進我が隊に向って猛烈なる射撃を加え、一弾に二十七名を殺傷されるなど、光景頗る惨憺悲壯を極めたるも奮戦突進して午後三時半、遂に三尖泡に進入し次いで四時二十分旅団は村山支隊と協力して巴荒地附近の敵騎兵を撃壊すべき師団訓令に接し、聯隊は第三大隊を第一線として三尖泡西側小流の線に展開し、砲兵の掩護に依って躍進又躍進、約三個中隊の騎兵を駆逐して五時四十分、北陀子及び巴荒地東方陣地を占領し、更に巴荒地に向って攻撃を続行し六時四十分に至り同村落の全部を確実に占領した。

此の戦闘に於いて、聯隊は初めて機関砲を使用した。蓋し冬営間、機関砲四門配属された為である。

(追撃及び守備)

二十九日払暁、第十一・第十二中隊を師団の左側背掩護の為巴荒地に残留させ、他は八時四十分五家子に集合の上、頭泡に向って出発したが途中に於いて頭泡の敵は既に退却したことを知り、東方より黒英台に向けて前進し、頭泡北端より更に進路を変更して敵を追撃して十時二十分、渾河左岸に到達した。

此の時敵は既に渾河を渡って北方に退却し去り、臨時立見軍は見事其の使命を全うした。

聯隊は一個大隊を黄臘陀子に出して前哨となし、主力は五家子附近に宿営して暫く同地附近の守備に任じ、二月十八日を以って前宿营地たる陽城塞に帰った。

参考文献

「大正十一年版 歩兵第十六聯隊史」より